



Publishing house: 2-19-32 Moriyama Kanazawa  
Jodo Shinsyu Jhokoji Phone & Fax 076-252-4922  
www.jhokoji.net info@jhokoji.net 2024.04.01

## 大悲無倦常照我

道因寺住職

相馬 豊

雨の降る中、浄光寺さんの報恩講に足を運んで頂きありがとうございます。只今ご紹介頂きました白山市道因寺を預かっております相馬豊と申します。よろしくお願い致します。

今年もこうやって宗祖親鸞聖人の御正忌、報恩講に私達は出あう事が出来ました。改めて報恩講に出あうという事は、どういうことか。「報恩講に始まり、報恩講に終わる」これが真宗の教えを聞く私達門徒の一

年ですと、先輩達が語り継いでくださいました。

先だつてある聞法会がありまして、その時に「なぜ私達は、仏法という教えを聞かなければならないのでしょうか」こういう質問を男性の方からお受けしました。これは本当に素朴な問いであり、大事な質問だなと思いました。どうして私達はこうやって教えを聞くという事が必要なのかなという事です。

宗祖親鸞聖人は今年で亡

くなられて七百六十年です。来年、三月二十五日から四月二十八日まで京都の東本願寺で宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年、浄土真宗が開かれた八百年、その協賛法要というかたちでお勤めが勤まります。親鸞聖人という一人の人間が生まれ、生涯を終えて一つの事を私達に語りかけられた。この事一つをどうか大切に自分分の人生を歩んで頂きたい。そういう事が非常に大きな意味を持っているのだと思います。

今から七百六十年前に亡くなられた親鸞聖人の肉声を実際に聞いた事はありません。また親鸞聖人はどういう御姿であったか実際に目にしましたという事ありません。私は生まれた時からお寺に身を置いておりますので、本堂のお内陣に親鸞聖人の御影が掛かっており、親鸞聖人はこういう御姿をしているのかなと思うことはある。あるいは京都の

真宗本廟の御影堂に親鸞聖人の御真影ごしんねいがあり、改めて親鸞聖人はこういう御姿をしているのかなと、想像しか出来ない訳です。けれど、肉声を聞いたこともない、御姿も見た事がないとはいっても、この亡くなられて七百六十年という長い時間を通して、その方の残された文字、言葉、そして言葉となった響きというものが今も私達の生活の中に根付き、芽吹いて大きく成長しているのだと思います。

今日は報恩講という事で私達は親鸞聖人の文字、言葉、言葉からの響きというものに『正信偈』のお勤めを通して出あわせていただいたという事があります。

報恩講というものの一つは、人に出あうという事です。具体的には宗祖親鸞聖人に出あう。そして、その人が語った言葉に出あう。さらに言葉に出あう事を通して私が教えに学ぶ。

そうすると報恩講とは何かといえ、出あいと学び。これが今日、私達が本堂に集ってきた大切な意味合いではないでしょうか。出あいと学び。人に出あうというのは、その人が語った言葉に出あう。言葉に出あうという事は、その響きを私が聞くという事。私はその言葉に学んでいくという事。これが報恩講の大切な一つの意味合いではないでしょうか。

### 大悲無倦常照我

教えというものは、例えば「浄土三部経」というお経さまがあるから、あるいは親鸞聖人の書き残された書物があるから私たちに伝わってきた訳ではありません。教えというものは、常に人から人へ伝わっていくということです。そして、ただ単に人から人へ教えが伝わった訳ではなくて、その方からの言葉の響きが、温もりを持ち、確かなものとなって今私達に届いてきたという事です。だから七百六十

年前に亡くなられた宗祖親鸞聖人の言葉に生きた方々によって、今も私達に語り掛けられていると言ってもいいのではないのでしょうか。

それが『正信偈』にはこのように書かれています。「源信げんしん公開こうかい一代教いちだいきょう」。「源信僧都の事が書かれた段がありますけれど、その最後に「大悲無倦常照我だいひむけんじょうしょうが」とあります。真宗の教えが私達に何を教えて伝えて下さっているかということ、教えを聞いて心が穏やかになるという事ではない訳です。常に私を照らし出してくれるもの、それが教えのはたらきではないでしょうか。例えば皆さんの正面に阿弥陀如来、ご本尊が安置されています。私達はこのご本尊に合掌礼拝し、お念仏を申します。このご本尊に手を合わすという事はどういうことなのか。

今お預かりしている道因寺の近くに老人保健施設がありま

す。そこにはデイサービスが併用されています。そのデイサービスに通う方々や施設に入所されている方々が、月に一回ですがマイクロバスに乗ってお寺にお参りに来るという事があります。バスを降りられた利用の方が介護職員の方にこう声を掛けるんですね。「今日、私はどこへ来ましたか？」そうすると介護職員の方が「今日はお寺さんにお参りに来ました」と答える。そうすると尋ねた方は「そうですか」と納得される。でも歩かれて本堂の前に来るとまた同じことを尋ねるんですね。「今日、私はどこへ来たんですか？」そうすると介護職員の方が「今日はお寺さんにお参りに来ました」と。

そして本堂の縁で靴を脱いで

もらって、障子戸を開けて入って来られた時です。何度も「今日、私はどこへ来たのですか？」とお尋ねになつていらっしゃる方が本堂の障子戸を開けて、お内陣の光景を見てまず何をされるかとい

うと座られます。そして、手を合わせて「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と。これはどういう事でしょうか。

私達はこの「今日、私はどこへ来たんですか？」と尋ねる人の事を病を持った方だと決めつけています。具体的には認知症という病状です。認知症といわれた時、私達は固定のイメージを持ってしまいます。皆さんの中でも認知症と聞けばどういふ事か大体想像が出来るかと思えます。その認知症の方がどうしてお寺の本堂に入ってきたら、誰から勧められた訳でもないのに自ら正座をし、手を合わせ合掌礼拝し、お念仏を申す。これはどうしてでしょう。突然そういう行動が出来る訳ではないと思います。そういう行動が出来るのは、その方が今までずっと生きて来られた歩みの中で、お寺という場所やご家庭の仏壇の前で、手を合わせるという生活習慣が身につけているからで

す。生活習慣として身につけているからこそ、その事が記憶の中から呼び起こされる。生活習慣になつていないとそういう事は出来ないと思います。突然出来るのではない。生活習慣の中に身を置いて、ちゃんと生活をされてきた。この事は非常に大事な事ではないでしょうか。自分の生活の中できちんとそういう場を持っているという事。

私達は認知症だと思っておりますけれど、本当に認知症なのでしょうか。逆にお寺に来てても手を合わさずにいる方もおられます。

それともう一つ。そういう方々がお寺に来て、一緒に『正信偈』のお勤めを最初にするわけです。調声をする私の「帰命無量寿如来」という声に合わせて「南無不可思議光」とちゃんと声に出してお勤めをされます。四月に新しくその施設に入られた職員の方はびっくりするわけです。自分の受け持っている

方が認知症という事は分かっていないけれど、まさか『正信偈』のお勤めが出来と思つている新入社員の方はいけませんから、それにはみんなびっくりするわけです。でもおじいちゃん、おばあちゃんには生活の中でずっとやってきたという歴史があるのです。一方で新入社員の方は生活の中で読まれた事も無い訳です。

そうすると、どちらが本当の健常者なのでしょう。健常者という言葉は使いますが、本当に何が大事なのかという事が、ここに一目瞭然ではないでしょうか。私達はあの方は認知症や、そしてあの方の様になりたくないなとイメージを持っています。しかしそういう事の前、私達の生活の中に大事な事がきちんと受け継がれているのだろうかという事です。

その教えに身を置くという事は、ちゃんとそこに自分の歴史が作られていくという事です。教えと真向かいになる自分の歴史です。その歴史がきちんと作られていけば、もし病気になつたとしてもちゃんとそれが自分の軸となつている。教えというものが自分の生活の軸になつている。だから病気は病気でも、この軸だけは離れないという事です。毎月施設の方々とお参りする時に、その方々は一本の軸を持つているな、ぶれない軸を持つてきちんと生きていくなと気づかされるわけです。反対に私達はその軸があるのかなという



う事ですね。

四年前に亡くなった自分の母親もデイサービスに何年か通つておりました。お迎えの時間は決まっていますよね。マイク口バスが迎えに来る。そうすると私は何をしたらか。九時過ぎに来るのなら逆算しますよね。何時に声をかけて起きてもらつて、何時に着替えをして食事をして、きちんとした格好をして介護職員の方をお願いするとう事をしていた。そうするとそこで私も大事な事を忘れていたのです。それは母親も人なので。人というものは日によって体調が変化します。ものくて(体調が悪くて辛い)辛い日もあるし、朝早く目が覚める日もあるし、朝食を食べたくない日もあるわけです。ところが私は何をしたらかという、逆算して用意をしなればいけないと思う訳です。だから母親に対して「今日はしんどいな、まだ眠たいな」とこう言っておきながらバスが

お迎えに来ますから送り出さなければいけないので、無理やり起こしたり、無理やり着替えをさせたり、無理やり食事を食べさせてしまった事があります。

何故そういう事をしてしまうのかというと「私は正しい」、ここに立ってしまうのです。そうすると相手の事が見えなくなる訳です。体調、言葉遣い、色んな事を発信してくれているのに、デイスリーブスにきちんと送り出すということが正しいと囚われてしまう。だから、ついつい食事が遅いとイライラしてくる。着替えが上手くいかないのは相手のせいにしてしまう。そうするとそこで次何が起こるかという争いです。喧嘩です。口喧嘩です。もういらぬ。もう今日はデイスリーブスに行かないと。こういう事が起こってきます。「私は正しい」争いの根はここにあるという事です。「私は正しい」というところに立ってしまえば必ずそこに争いの根は出てくるという訳です。

私達の生活というのは「私は正しい」が中心になっておりませんか。生活の中であっても、職場や学校の中であっても、ついこの間に立ってしまうことはなかったでしょうか。私は正しい、あなたの言う事は間違っている、そうなれば当然相手とぶつかります。ぶつかれば争いが起こります。そうするとどうしても「私は正しい」と、こういう所に立ってしまう。そういう自分というものを教えてくれるのが教えというものでしょう。常に私を教えてくれるという事。常に私達は自分が正しいという所に立って物事を見がちですが、それが争いの根です。本当にそういう私の在り方を改めて教えてくれるという事ですね。一つ一つの事が私を教えてくれる。

### 本当の自分

「私」というものを、自分が一番知っていると皆さんよく言うのですけど、その事を分かりや

すく言われた方がおられます。二年前にお亡くなりになりました方で浅田正作さんという方がおられました。題は「いれもの」です。「やどかりが自分の殻を

自分と言ったらおかしいだろう／私は自分の殻を自分だと思っている」こういう浅田正作さんの短い言葉があります。やどかりというのは海辺にいる水生動物ですね。成長するごとに背中の殻を小さい殻からどんどん大きい殻へ変えていきます。あの殻の中は空っぽですよ、何も入っていない。やどかりの殻の中には、やどかりが入っていません。ただの殻ですから。やどかりが自分の殻を自分と思ったからおかしいだろう。私は自分の殻を自分と思っている。では私達はどういう殻を付けているのでしょうか。浅田さんがここでいう殻とは何でしょうか。

私達は今日まで色んなものを自分の殻として生きてきましたね。学歴であったり、あるいは自分が従事してきた職業だった

り。社会的な貢献をしてきたという名声、そして財を成したという事など殻としてくっ付けていませんか。

お預かりしているご門徒さんの中で、取締役をされた方がおられるのですけど、定年退職するまでは関連企業から何百枚と年賀状が来たというんですね。読むのも嫌になったと。ところがいざ一線を退いたその年です。今まで何百枚と来たものがたった十枚。これが私なのだと言われましたね。錯覚をしてしまう訳ですね。このやどかりの殻です。そういうものが私だと思っていた。それが一線を退いたら何も無い、ただの人です。その十枚をよく読んでみると、ずっと自分がお世話になった方々、あるいは同級生など一番大事にしなければならぬ方々をおろそかにしていたなど、そういう事を話されていました。

また今年の八月十六日に私の

住んでいる地域で一年間にお亡

くなりになられた方の追弔法要が行われました。その追弔法要を開催するのが老人会です。その老人会会長が控室に挨拶に来られました。その方は最終的には小学校の校長先生をいくつか歴任して退職された方です。私も小学校時代にお世話になった方です。その方とそこで世間話をしていました。そこで私は最後にその方に、何十年と教育関係で色んな事を見ているし、色々な事を学ばれているだろうからどうか一つ、何か知識をお願いしますと尋ねた。そうするとその老人会長さんがすぐ言ったのがこの言葉です。「ただ食べてきただけや」。これには私もびつくりしました。小学校の先生から最後はいくつかの小学校の校長を歴任されて、そして色んな教育関係でお仕事されて、今老人会会長をされている方に、「自分の人生は何ですか」とお尋ねしてみたら「ただ食べ歩いてきただけや」こういう事を素

直に言われました。

私達こういう言葉は出ないじゃないですか。「ただ食べてきました」とはなかなか人前では言えませぬよ。ついつい自分のやつてきたことを誇りとして言いたくなりませぬか。自分を見せるというかたちで。虚勢を張つても自分はこのいうものだという事を言いたい訳です。ところがそういう事は一切言わず「ただ食べてきただけ」と。これはすごいなと思いましたがね。自分の事をちゃんと知られている。正にこの方は自分の殻を持つていないという事です。振り返つてみてよくよく考えたら、ただ食べる事だけに必死に生きてきた。なにかそこに改めてそういう言葉で大事な事を語り掛けて下さったなと思いました。

そしてこれも今年の五月の連休でしたけれど、言葉として教えられました。お参りに行った先の門徒さんのお家に結婚して

丸三年経った方がおられます。

お参りが終わった後にその方がこうおっしゃいました。「結婚して丸三年経つて、ようやくお腹にお命を授かりました」と。二十代半ばの御嫁さんです。この言葉にもやっぱり驚きました。皆さん、最近こんな言葉聞いた事ありますか。お命を授かりましたという言葉。逆にどんな言葉ならよく聞きますかね。こういう言葉をよく聞きました。「でか。子供ができました」、「できちゃった」とか。こういう言葉の方が現代ではよく使われる。私達も私もよく耳にする言葉です。だから二十代半ばのお母さんの「ようやくお腹にお命を授かりました」こういう言葉の中にも大事な事を伝えてくれているなと思いました。

今、よくよく考えて頂きたいのですが、私達も最初はお母さんのお腹の中でお命を授かり、そのお命が育まれてきて、そして肉体を得て、この世界に産み落とされてきたわけです。最初

から「私」という意識はあつた

のでしょうか。最初から「私」という意識はないのです。ただお命を授けられ、育まれて肉体が生まれてきたのです。だから私達は最初から喋った訳でもないし、何も出来ない。ただ「おぎゃー」という産声を上げ、その後「おぎゃー、ぎゃー」と泣くだけです。つまり身体が先に生まれて来た訳です。

もう一つ考えて頂きたいのですが、私達はそれぞれに誕生日をお持ちです。この誕生日は自分でつけられたのですか。私達は「私の誕生日」と言っておりませんが、誕生日というものには自分でつけたものではない。お命を授かって、あなたの誕生日を待ち望んで待っていてくれた方が、あなたは何年の何月何日何時何十分頃に生まれてきたんだよという後付けされたものです。私が生まれた事を記憶してくれた方によって後付けされたのが誕生日です。だから「私の

誕生日」と言っていますけれど、実は違うのですね。覚えてくれた方々によってつけられたのが誕生日です。それを「私の」と言っているのです。もともとは何にもないのに。お命があっただけなのに。お命を頂き今も生きていくのに、私達はいつの間にか私の命、私の身体、私の思いと全部「私」を付けていませんかね。私の所有物のようにしてしまっている。もともとはお命を授かっただけである。

だから今も私を生きているのではないで、命を生きているのではないでしようか。私達は私を生きようだけけど、実はお命を生きようではない。お命を生きようという事を忘れている。私達はお命を忘れてしまつて、「私」、「私」と言っているから浅田正作さんは、入れ物である自分の殻を自分と言つていたらおかしいだろう。私は私の殻を自分と思つている。何かここに大事な事を私達は見失つて来た。見失うし、忘れてしまつている。

そういう私の在り方を先に教えに出あつた方々によって、この事が大事やよと伝えられてきたわけです。生活を営む中でこの事は大事やよと。先の方から

そうやって私達はちゃんと受け取つて来た。だからデイサービスに通う方々や保健施設に入所している方々がお寺に来た時に、真つ先に正座をし、合掌礼拝し、お念仏申すという事は自分から出来た訳ではなくて、それは大事な事やぞと受け継いできた歴史です。私達はそういう事を通じて初めて自分とは何かという事を改めて教えられる。

教えを聞かなければならないということ、私の中に問題があるからなのです。教えを聞いて心が穏やかになるとか、落ち着くとかそういう事ではなくて、教えを聞かなければならないものが私の中にあるという事です。それは自分ではその事に答えを出す事ができないからです。例えば大切な人と別れていかなければならないという悲し

みです。悲しみを背負いながら生き続けて行く。

### はたらきに出あう

今年の三月十二日にですね、二十六歳になるご門徒さんの長男の方がお亡くなりになりました。中学校、高等学校で吹奏楽部で楽器を扱っていた。高校を卒業した後、楽器作りの専門学校に通われて、日本で有名な楽器を作るメーカーに就職されました。家族はその方の誕生日に毎年プレゼントを贈っていた。ところが、今年誕生日にプレゼントを受け取つたという連絡もないし、どうしたのかなと思つていたそうです。そうしているうちに宅配会社から電話が掛かってきて、ここ三日間お荷物を届けに行つていますが、お返事がありません。このお荷物どうしたらいいでしょうかと聞かれた。そこで初めて何かあったのかなと思つて、白山警察署にまず相談して、そして住所のある県警からその近くの警察署の

警察官に長男のマンシヨンの方に見に行つてもらつた。そうするとマンシヨンの玄関の鍵がかかつていない状態。部屋は電気が付いている。そして食卓のテーブルにうつ伏せになつてそのまま息を引き取つていた。事件性があるか無いか、そういう事で司法解剖してみたら急性心臓麻痺というかたちでした。ご両親はびつくりです。驚きです。音楽が好きで楽器作りが大好きでそれをこれからも伸ばしていこうという矢先でした。

毎月十二日お参りに行きますけれど、まだ私もなかなか両親に声を掛けられない状態です。お参りが終わったらお父さんもお母さんも涙、涙です。なかなか涙が収まらない。どう声を掛けたいのか、落ち着いていないのでなかなか声は掛けられません。表面的な言葉は掛けられても家族の一員を失つたという悲しみの深さはどんどん膨らんでいきますから、なかなか声を掛けられません。それは皆

さんも同じでなかったでしょう。大切な人を失った悲しみは、月日を追うごとにどんどんどんどん膨らんでいく訳です。自分で何とかしようと思ってもなかなか収まらない。苦しみもそうですよ。苦しい時、自分でなんとかしようとかして見ても、どんどん苦しくなる。人生に迷う事もありました。例えばこれまでこういう言葉を吐いた事、何回もありませんか。「これからどうしたらいいだろうか」と。自分が歩む方向が見えなくなつた時、どうしたらいいのかな、こういう言葉を胸の中で何度も吐いていませんか。そういう私の中に私ではどうすることもできないものを抱えている。そのどうすることもできない私という事を教えて頂くのは何処かといえ、これは皆さんが一番よくご存知のご和讃、親鸞聖人が七十六歳の時にお作りになられた『浄土和讃』の第一首目です。

「弥陀成佛のこのかたは／い

まに十劫をへたまへり／法身の光輪きはもなく／世の盲冥をてらすなり」

ここに「法身の光輪」と、法身ですから教えです。教えの輪、光輪と言います。具体的に法身とは何を見て欲しいかというところ、阿弥陀如来です。阿弥陀さんを見て欲しいのです。阿弥陀さんの後ろに光が差しています。御光。四十八本あります。皆さんのお内仏、仏壇のご本尊の阿弥陀如来、絵像であり、木像であっても御光がちゃんとあります。私達は阿弥陀さんを通して何に出あうかという光です。その教えの光が私達をあまねく照らしてくれているのです。私達が阿弥陀如来に手を合わせて念仏申すという事は、その教えの光に今あうという事です。だから今私達は智慧の光の中に出あっている訳です。そして、その光というのは「はたらき」です。それは「照らす」という事です。光は何をするのかというのと照らすのです。照らすから影

ができるんです。一つ一つ照らし出される。何を？「世の盲冥」真を知らずにいる私。世の盲冥とは、真を知らない私。それを照らすはたらきが教えですよ。それを親鸞聖人は『浄土和讃』の一首目にお書きになった。

私を照らしてくれているのです。私の中に自分では気が付かないけれど、無明という闇を抱えていますと。闇の中身は何か

挫折したり、怒ったり、苦しんだり、悩んだり、不安になったり、もの自分がの中に起りますよ。朝起きて今日一日穏やかに過ごしたいなと思っても、家族の何気ない一言によって穏やかな朝が崩れていけば、穏やかな朝いと思っても出来ないのです。そういう私というものを教えが常に照らし出してくれる。これを『正信偈』では「常照我」智慧は常に私を照らし出してくれ。常にはたらきに出あうという事です。だから私達は、教えに私が出あう訳です。私が教

えを聞いているようですけど、実は教えが私を照らし出してくれている。そうすると先程の「私は正しい」こういうものが見えてくる訳です。自分の正義感、正しさに立って相手と喧嘩するような言葉を発してしまう。常に私というものが見えなくなっている。その見えなくなっている現状を何度も見ているので

今一番分かりやすなのは、自分が見えなくなっているロシアのプーチン大統領でしょう。あの方も戦争をしてはいけないという事は知っています。人を傷つけてはいけないという事は知っています。知っています。もそれをしなければならぬのは、「私は正しい」からです。ウクライナのゼレンスキー大統領もそうです。どちらも「私は正しい」と言っているのです。お互い声を掛け合って対話するのではなく、ぶつかり合うだけになつていく。私のやっている事は正しい、そこに争いの根が起

こつてくる。

プーチン大統領は六十九歳です。私も歳がそう離れていないのでプーチン大統領のやる事が私にも分かるんです。私もいつの間にか頑固者になりました。柔軟な発想が出来ないのです。だからプーチン大統領を見てみると自分を見ている様です。我が家にはミニプーチンがいるのです。私です。私そのものがプーチンです。同じものを持っています。同じ体質を持っているのです。「さるべき業縁のよおせばいかなるふるまいもすべし」(『歎異抄』のことば)です。縁が起これば何をするか分からぬ。縁が起これば何をするか分らない。衣を着ているから何もやらない、そんなことないです。縁が起これば私も何をするか分らないです。縁があれば必ずぶつかり合います。そういうものが見えてくるのです。もしも私が親鸞聖人の教えに出あっていなければ、私がミニプーチンだという事には気が付かないので

す。教えの言葉によって常に私というものが教え続けられているから、プーチンⅡ私だと気づく。改めて自分の姿、内面というものを抉り出してくれる。そういう言葉が報恩講の『正信偈』のお言葉ではないのでしょうか。

教えというのは常に私を照らし出してくれる。本当は一番見たくないこの私というものに教えが出あわせてくれる。だから教えに出あうという事は、人に出あう、言葉に出あう、一番大きなものは自分に出あうという事です。この自分に出あうという事がなかなか難しい訳です。でも私達はその自分というものを受け止めて行かなければならない。私の中にどういふものが渦巻いて生きているのか、なかなかそういう事は自分では気が付かない訳です。気が付かないから色んな言葉に出あって、教えに出あうという事です。

今NHKで大河ドラマ「鎌倉

殿の十三人」というものをやっています。二週間前ですけど、北条時政の連れ合いの牧殿が謀反を起こしましたね。そして北条義時のお継母さん、牧殿役の宮沢りえさんが、その別れの挨拶のシーンで北条義時にこう言うのですね。「もう、私は謀反を起こしませんよ」と。次のセリフが凄かった。「ただし、私の中にくすぶっている怒りの炎は消えませんがね」と。これ凄いですね。脚本家の三谷幸喜さんは凄いなと思いましたね。こういう言葉を使うのだと思います。表面的にはもう北条家とぶつかる事はしません。謀反は起こしません。表面的にはそう言う。ところが自分の怒りの炎は消す事はできません。人間を表していますね。三谷さんは真宗の教え聞いている人かと思

いましたね。凄い言葉ですよ、これ。こういう事を教えという事で表すのでしょうか。この言葉の中にこれ正に真宗やと思いましたが。真宗というのはそういう

自分を明らかにするのは。表面的には穏やかだけど、中身はドロドロしているのではないですか。そういう自分と出あつていける教え。それが教えに出あう、人に出あう。そして自分に出あうという大切な意味を持っているかと思

《編集後記》

◇本文は令和四年十月十七日、浄光寺「報恩講」の法話録であります。海に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

\*行事のご案内\*

「おてらくじ」

五月十二日・午後二時  
落語 立川志らら  
法話 浄光寺住職

「きこまいけ」(聞法会)

毎月・二十八日 午後二時  
お気軽にご参加ください